2 ラウンドともにポイント獲得ならず、課題が残る結果に。

2022 全日本スーパーフォーミュラ選手権 第 7 戦/第 8 戦 レポート

開催日程	2022 年 8 月 20 日(土) / 21 日(日)	開催場所	モビリティリゾートもてぎ(4,801km)
大会名称	2022 年全日本スーパーフォーミュラ選手権 第 7 戦/第 8 戦 (各 37 周又は 75 分 / 参加台数: 21 台)		
天候 / 気温	8 月 20 日(土) 晴れのち雨 / 26 度　21 日(日) 曇りのち晴れ / 27 度→31 度		
観客動員数	8 月 20 日(土): 2,800 人　21 日(日): 4,800 人　計 7,600 人(主催者発表)		

前戦富士から 1 ヶ月余りの 8 月 20 日～21 日。例年よりは暑さが和らいで過ごしやすい気候の中、モビリティリゾートもてぎにて第 7 戦、第 8 戦が行われた。今大会は開幕ラウンド以来の 2 レース制。土曜日、日曜日ともに予選・決勝が行われるため、金曜日に 90 分間の専有走行が設定された。好天に恵まれた専有走行でまずはマシンチェックを行い、セッティングを詰めていく。セッション終盤にはニュータイヤを履き、予選に向けてのアタックシミュレーションに入ると、国本は 5 番手タイムとなる 1’31.693 をマーク。小林は 31 秒台にはわずかに届かなかったが、12 番手(1’32.015)で走行を終えた。小林、国本の両選手がマシンに手ごたえを感じており、翌日からの 2 連戦に期待が高まった。

【第7戦 予選】　　天気: 晴れ / 気温: 26度 / 路面コンディション: ドライ

#7　小林可夢偉　Q1B組: 7位 / 1’31.494
#18　国本雄資　Q1A 組: 9 位 / 1’31.640

20 日土曜日、当初の予定から 15 分遅れの 9 時 20 分から午後の決勝に向けての予選が始まった。気温 26 度、路面温度 35 度のコンディションの下、まずは Q1A 組に国本が出走。セッションが開始されるとすぐにコースインし、徐々にタイムを削っていく。だが、国本は前日とは異なる路面コンディションに翻弄され十分にパフォーマンスを発揮することができず、9 番手(1’31.640)でノックアウトとなった。
5 分間のインターバルを経て、Q1B 組がスタート。小林は残り時間 5 分のタイミングで再度コースインを果たすと計測 2 周目にアタックに入り、1’31.494 をマーク。この段階でノックアウトラインぎりぎりの 6 番手だったが他車にタイムを更新されてしまい、惜しくも 7 番手で Q1 敗退となった。
第 7 戦決勝スターティンググリッドは小林が 14 番グリッド、国本が 17 番グリッドとなった。

【第 7 戦 決勝】　　天気: 雨 / 気温: 26 度 / 路面コンディション: ウェット

#7　小林可夢偉　14 位　/　#18　国本雄資　15 位

午後になるとどんよりとした雲が広がり、ダミーグリッドへの試走が始まった頃からポツポツと雨が降り始めた。決勝の直前で本降りとなったため、ウェット宣言のボードも出された。各車慌ただしくグリッド上でレインタイヤへと交換を行ったが、完全なウェットセットにすることはできないままスタート時刻を迎えた。14 時 30 分、気温 26 度、路面温度 35 度のコンディションでセーフティーカー先導の下、レーススタート。3 周終了時にセーフティーカーが解除となり実質的なスタートが切られると、小林は徐々に順位を上げていき、31 周目にはポイント圏内の 10 番手まで浮上した。しかし、バイザー内の水滴で完全に視界を失ってしまい、走行が困難な状況になってしまったが何とかコース上に留まり、14 位でチェッカーを受けた。
一方、国本も 14 番手までポジションアップを果たしたが、28 周～30 周終了時まで導入されたセーフティーカーラン中にブレーキが冷え過ぎて作動しなくなり、こちらも苦しい走行を強いられた。厳しい状況の中、国本は 15 位でフィニッシュとなった。

【第8戦 予選】　　天気：曇り / 気温：27度 / 路面コンディション：ドライ

#7　小林可夢偉　Q1B組：5位 / 1’30.995　Q2：12位 / 1’31.412
#18　国本雄資　Q1A組：8位 / 1’31.944

21日日曜日、予定通り9時15分から第8戦の予選が開始。気温27度、路面温度32度、曇り空ではあるが路面はほぼドライコンディションとなった。今回もQ1A組に出走したのは国本。セッションが始まるとすぐにコースインし、マシンチェックを行った。一旦ピットに戻り、ニュータイヤに履き替えるタイミングでコースアウト車両が発生したため、赤旗中断となる。9時23分、残り時間6分25秒で再開。国本は残り時間4分40秒となったところでコースへと向かったが、力を出し切れないまま8番手（1’31.944）で予選を終えた。
9時35分、Q1B組がスタート。A組より路面コンディションが良くなったこともあり全体的にタイムアップする中、小林も30秒台をマーク。5番手（1’30.995）でQ2進出を決めた。
10分間のインターバルを経て、Q2が始まったのは9時55分。小林は残り時間4分40秒のタイミングでコースに入っていった。だが、Q1の自己ベストタイムを更新することはできず、12番手（1’31.412）に留まった。
第8戦決勝スターティンググリッドは小林が12番グリッド、国本が16番グリッドとなった。

【第8戦 決勝】　　天気：晴れ / 気温：31度 / 路面コンディション：ドライ

#7　小林可夢偉　17位　/　#18　国本雄資　12位

ウェットコンディションとなった第7戦から一転、第8戦決勝はサーキット上空に青空が広がり、真夏のようなコンディションとなった。気温は31度、路面温度は45度まで上昇し、14時30分にレーススタート。小林は#53 佐藤選手、#12 福住選手と並んで1コーナーに進入したが、その中で小林のフロントウィングがアウト側にいた福住選手の右リヤタイヤに接触してしまった。11周終了のタイミングでタイヤ交換を済ませると、小林は19番手でコースに復帰。だが、その直後にフロントウィングが破損していることが判明する。オープニングラップの接触は走行に支障がないと思われたのだが、タイムは上がらず、マシンが思うように曲がらなかったのだ。13周終了のタイミングで2度目のピットインを余儀なくされ、フロントウィングを交換。その後は1分34秒台をコンスタントにマークし快走を見せるが、2度のピットインが痛手となり、小林は17位でレースを終えた。
一方、国本は12周終了のタイミングでピットインし、タイヤ交換を行ったが若干のミスで遅れてしまい、18番手でコースに復帰した。終始思うような走りがでない国本だが徐々にポジションを上げていき、ポイント獲得まであと一歩の12位でチェッカーを受けた。
茂木2連戦を残念ながら「0ポイント」で終えたKCMG。次戦鈴鹿は泣いても笑っても最終ラウンドです。応援してくださるすべての方に結果でお返しができるように、初優勝を目指し、チーム一丸となって戦って参ります。引き続き、応援よろしくお願いいたします。

【ドライバーコメント】
#7　小林可夢偉選手
金曜日の専有走行は良かったのですが、第7戦は予選からうまくいかず、決勝はドライになると見込んでいただけに裏目に出てしまいました。さらにバイザーに雨が入って前が見えなくなってしまい、良いところがありませんでした。
第8戦はスタート直後の接触でフロントウィングを壊してしまい、パフォーマンスが出ませんでしたが、交換してからの調子は良かっただけに非常に悔しいレースになってしまいました。
今のマシンのペースの良さを次の最終戦鈴鹿で発揮したいと思います。

#18 国本雄資選手
第7戦は前日の専有走行からコンディションが変わってしまい、さらに決勝直前に急に雨が降り出したためドライセッティングのまま行った結果、ブレーキが冷え過ぎて効かなくなり、苦戦しました。
第8戦も予選から苦戦し、決勝も含めてまったくパフォーマンスを発揮できませんでした。
最終戦の鈴鹿は自分が得意としているサーキットなので、優勝目指して頑張ります。

【監督コメント】
松田次生監督
第7戦は両選手がQ2に進出できなかったところから厳しい状況になってしまいました。さらに予想と天候が変わってしまい、クルマのパフォーマンスを十分に出すことができませんでした。
第8戦は小林選手との無線のやり取りがうまくできず、それによって2度ピットインしたことで勝負権を失ってしまったことが非常に申し訳なかったです。国本選手もピット作業時のミスで3、4秒遅れてしまい、それがなければもう少しポジションを上げられたと思うと非常に悔しい結果になってしまいました。
最終戦鈴鹿はまずは2台ともQ2に進出させて上位グリッドを獲得する。そうすれば表彰台に上がれる可能性は十分にあるので、約2ヶ月のインターバルでしっかり分析して挑みます。